

シュタイナー教育について語る！！

シュタイナーについて



ルドルフ・シュタイナー

Rudolf Steiner (1861 - 1925)

人智学運動の創始者。1861年2月27日、オーストリアとハンガリーの国境の小さな片田舎クラリエベック(現在はユーゴスラビア領)に生まれる。1879年ウィーン工科大学入学。数学、物理学を専攻するが、哲学研究に大きな関心を抱き、K.J シュレーアー(ドイツ文学)、F.ブレンターノ(哲学)らの影響を受け、本格的にゲーテ研究を開始する。1891年ロストック大学において博士号取得。以後、雑誌「文芸」「ルシフェル」「演劇新聞」等の編集者、ベルリン労働者教養学校の教師等として活躍。各地でゲーテ研究、哲学、人智学に関する講演を行う。1915年バーゼル・ゲーテアム完成。1919年シュトゥットガルト・ヴァルドルフ学校を創設。

シュタイナー学校の歴史

第1次世界大戦の終結後間もない1919年春、ルドルフ・シュタイナーは、ドイツのシュトゥットガルトにあるヴァルドルフ・アストリアたばこ工場の労働者たちに、彼の社会改革運動である「社会三層化の運動」についての講演をするために招かれた。その講演が労働者の間に大きな反響を巻き起こしたため、シュタイナー思想の実践運動家で工場主のエミール・モルト氏は、工場労働者の子どもたちのために学校を作り、指導してもらえないかと彼に頼んだ。

シュタイナーは、4つの条件を付けてそれを引き受けた。それは、

- ・学校はあらゆる子どもたちに対して開かれていること。
- ・共学であること。
- ・12年の一貫教育であること。
- ・子どもたちと直接関わりを持つことになる先生たちが、学校経営において中心的役割を担い、行政や財界からの影響は最小限に押さえること。

モルト氏はこの条件を受け入れ、そして先生になる人たちの訓練期間の後、自由ヴァルドルフ学校(Die Freie Waldorfschule)が、わずか半年後の1919年9月7日にシュトゥットガルトに開校された。

この教育運動はドイツだけでなく、すぐにオランダ、スイス、イギリス、アメリカへと広がった。第2次世界大戦中は、ドイツ国内ではナチスの弾圧を受けて一時閉鎖されたが、戦後再開されて全世界に広まり、特に1970年代以降はまさしく爆発的な勢いで増えている。

そして現在、世界 50 ヶ国に 650 を越えるシュタイナー学校があり、およそ 12 万人の子どもが通っている。本場ドイツでは、1975 年に 42 校であったものが 1995 年には 155 校に増えた。北アメリカ(カナダ、メキシコを含む)には 125 ほどの学校がある。ウィスコンシン州ミルウォーキー、ミシガン州デトロイトには公立のシュタイナープログラムがある。日本では幼稚園は各地に存在するが、小学校は東京三鷹市に 1 校あるのみである。中学・高校にはない。各地で様々な運動が始まっているが、学校創立までには至っていない。

教育制度の概要

1. 日本の教育制度

(1) 学校制度

初等中等教育は、小学校 6 年間、中学校 3 年間、高等学校 3 年間の 12 年間で、そのうち 6 歳から 15 歳まで、小学校・中学校の 9 年間は義務教育である。

高等学校は、義務教育修了者を対象にした普通教育、専門教育を施す機関であり、普通科・商業科・工業科・農業科・水産科・家庭科・看護科・その他などの学科に分かれている。

またこの他に、就職技術や実生活に則した教育を行う専修学校や各種学校、各種専攻科が設置されている高等専門学校、心身障害者のための盲学校・聾学校・養護学校などがある。

(2) 教育に関する法律・行政

昭和 22 年、「教育基本法」が憲法をベースにして制定された。内容は教育の方針、機会均等、義務、社会、政治、宗教教育、教育行政などについて定められている。また、同年に制定された「学校教育法」では、現行の 6 3 3 4 制、各種学校、専修学校などについて定められた。

学校教育に関する行政監督は、文部省の管轄である。文部省は、小学校・中学校・高等学校のそれぞれに教育内容の基準である「学習指導要領」を公示する。これは教科書策定の基準にもなり、ほぼ 10 年ごとに改訂されている。今までの改訂は昭和 26 年、(30 年)、35 年、45 年、53 年、平成元年に行われている。

(3) 教科書・教材制度

「学校教育法」により、小学校、中学校、高等学校では、教科書を使って授業を行うことが義務づけられている。さらに教科書は民間で著作・編集され、文部大臣が適当かどうかを審査する検定を経たもの、あるいは文部省著作のものを使うことが義務づけられている。

この教科書検定制度は、民間の著作者の創意工夫と適当なガイドラインを確保することを目的としていて、文部省は、検定が客観的かつ公平に行われ、教育的配慮が行き届いた教科書ができるよう「教科書図書検定調査審議会」を設置している。こうして検定を経た教科書の中から、各教育委員会などが選択する。

義務教育期間の国公立の各学校(小・中学校、盲学校・聾学校・養護学校の小・中学部)には、教科書を無償で給付している。

2. ドイツの教育制度

(1) 学校制度

ドイツは州ごとに文部省があり、それぞれ独自の組織、制度などを確立している。基礎4年、中・高5~9年生があり、義務教育は多くの州で6歳~15歳の9年間(一部の州では10年間)。基礎の4年間は初等教育、以降が中等教育にあたり、中等教育は以下の4つの系統に分かれる。

ギムナジウム (9年制)

アカデミック系。いわゆる普通科で、高校卒業後に大学(4年間)進学を希望するものが多い。約26%の生徒がこのコースに進んでいる。

実科学校 (6年制)

テクノロジー系。工業科・商業科にあたり、主に卒業後、職業専門学校へ進学を希望している者が多い。約17%の生徒が進んでいる。

基幹学校(ハウプトシュ・レ) (5年制)

技能者、職人育成コースで、約13%の生徒がこのコース。

総合制学校 (9年制)

「ギムナジウム」と「実科学校」の要素を併せ持つ。約4%が進んでいる。

(注)下線の約**%は、義務教育終了後の在籍(進学)率。

(2) 教育に関する法律・行政

各州の文部省が中心となり独自の「州カリキュラム」を作成していて、各学校は原則としてこれに従う。

「州カリキュラム」は日本の学習指導要領に比べると、自由に時間割を作成できるなど比較的自由である。例えばある中学校の社会科は州5時間と割り当てられているが、そのうち4時間は「州カリキュラム」に沿った内容、残りの1時間は学校の自由裁量で決めてよいことになっている。

(3) 教科書・教材制度

各州独自で教科書検定が行われる(一部に検定が行われない州もある)。「州カリキュラム」を基準に検定が行われるため、ある州で認められた教科書が別の州では認められないというケースもある。

原則として教科書は使用することになっていて、ほとんどの学校で使われているのが現状である。教材は、教科書の補助として多くの教師が自由に活用している。

シュタイナー教育の特色

12 年制の一貫教育

シュタイナー学校は 12 年制の一貫教育である。日本にある大学(高校)の付属学校のような、小、中、高校と同じ学校名の学校へ入学試験なしであがっていくのとは違う。同じ敷地で、同じ校舎で、12 年間学ぶ。例えば、小学校が 12 年生までであるようなものである。

担任持ち上がり制

シュタイナー学校では、1 年から 8 年までクラス替えもなく同じ担任が受け持つ。1 年生のときの担当になった先生は、8 年生を終えるまでずっと担任の先生となっている。

エポック授業

シュタイナー学校には「エポック」と呼ばれる、主要な教科(国語、算数、理科、社会)の中の 1 教科を数週間続けて勉強する授業がある。普通は日本と同様に、1 時間目に国語、2 時間目に算数、3 時間目に理科...など細切れの授業を行う。エポック授業では、国語を 4 週間やっている間は算数はその間は全くやらないということになる。国語の 4 週間のエポックが終わったら、次の 4 週間は算数をやり、その間国語はやらない。

教科書がない

シュタイナー学校では教科書を使わない。1 年生から 5 年生まではいわゆる教科書を使わず、子どもたちが持っている「エポックノート」というものに 1 年を通して書き込みをしていく。彼らは自分の経験と学んできたことを記録した、自分自身の「教科書」を作っていく。上級生になると「エポックノート」の補助として、教科書を使うようになる。

芸術的科目

低学年では知的な教科には重点が置かれない。すべての教科は「芸術的」なやり方で導入される。また、あらゆる科目は常に生活・世界・生命と結び付けられていて、具体的なイメージを伴って伝わるよう配慮される。

テストがない

シュタイナー学校には「テスト」というものがない。つまり点数をつけるということがない。だから当然、中間テストや期末テストというものはない。

通信簿はどうするのか

テストがないなら通信簿はどうするのか。通信簿も点数はつかない。日本のように学期ごとに通信簿をもらうのではなく、学年の終わりに 1 度もらうだけである。

中身は点数による評価ではなく、教科ごとに先生の評価が言葉で手書きされる。それから先生から見たその子の人物描写や勉強面の観察等が手書きされ、最後にその子にふさわしい、先生の手作りの詩が書かれる。

外国語は 1 年生から

日本では英語を中学 1 年生(ドイツの学年にすると 7 年生)から、ドイツの公立学校でも英語を 5 年生から、フランス語を 7 年生から勉強し始めるが、シュタイナー学校では 1 年生から英語を習い、5 年生か 6 年生から第 2 外国語(学校によって違う)を習う。

シュタイナー教育の算数科

12、13 歳の算数

12 歳、13 歳ごろの「前思春期」になると子どもの心の中に原因と結果の「因果関係」を理解する力、あるいは論理的な判断力が育ってくる。今まで目的に向かって意志が働いてはいても、「なぜこうなったのか、なぜならこうこうだから」という種類の論理的な関係は、まだそれほどはっきりと意識的に把握されてはいなかった。小学校 1 年生、2 年生は、暗記させれば喜んでなんでも暗記するのだが、3 年生、4 年生になってくると、何で暗記しなければいけないのか、ということが漠然と、いわば情緒的に問題になってくる。それは子どもの心の中で、原因と結果の関連性がだんだん意識されるようになってくるからである。このことは性的な器官の成熟期とだいたい平行して発達してくる。12 歳、13 歳になると、一般に因果関係の説明に興味を持つようになり、理屈っぽくなっていく。それまでは理屈ではなく感情で、うれしければ無条件でそれを受け入れるし、嫌だったら無条件で反発したのだが、小学生の高学年から中学生になるに従って、それとは別に、なぜそうなのか納得できなければ承知できないというような考え方が育ってくるのである。

シュタイナーはそういう際に大事なのが算数の勉強だ、とも考えている。足し算、引き算、掛け算、割り算を一体何のためにやるのかというと、普通私たちの常識では、小学校の時にしっかりと四則計算や分数計算をやっておかないと、中学・高校でついて行けなくなるからだ、と考える。あるいは将来、理科系の勉強をする時に基礎ができていなければいけないから、というのである。けれども、シュタイナー教育の観点から言うと、そんなことのために小学校で算数を勉強するのではなく、子どもたちの心の中に、正しい「秩序」の感覚を生み出すために算数の勉強をするのだ。人生の中で、足す行為や引く行為、あるいは掛ける行為、割る行為というのは、単に数の上の問題だけではなくて、あらゆる種類の人間関係、社会関係の中で基本的に重要である。「押しでもだめなら引いてみな」という歌があるが、そういう種類のことがいくらかもあるわけである。それを子どものときに算数で学ぶのである。ある未知の対象があった時に、その対象を数によって整理する。数によってきれいに割り切ったり、きれいに配分したりすることに喜びが感じられると、子どもの感情の営みの中にある種の透明な光が生まれてくるのである。そういうことがない子どもは、むしゃくしゃしたり、悔しかったり、悲しかったりする時に、それを明るい方向に整理することができないので、心が混沌としてしまい、それが本能に悪影響を及ぼしてしまうのだ。それで小学校 1 年生、2 年生のころから算数の計算を始め、計算の中で人生というものを学んでいくのである。その学習が前思春期に攻撃的になっていく本能に、明るい秩序を与えるのである。

均衡感覚と算数の関係

小学校の算数の勉強ができるできないというのは、どうもその子の均衡感覚に発達と密接な関係があるらしい。

算数と幾何は均衡感覚や運動感覚と直接に結びつく学問である。子どもは6-7歳になると、今まで無意識のまま身体の中に組み込まれていた知的能力が身体から自由になり、心の中にイメージを自由に創り出す力(表象力)に変わるのだが、その時点で均衡感覚や運動感覚によって支えられたその力が、算数や幾何を理解する能力になるのである。だから算数や幾何は、フォルメン線描*やオイリュトミー*によっても支えられ、発達させられるのである。特に数の中に秘められた様々な対応関係やその変化、空間の中での位置(前後左右上下の関係)、あるいはそれら相互の調和や対立といった事柄は均衡感覚に関わることなので、均衡感覚が子どもの中に育っていなければ、いくら算数を教えても深くそれを受け止められない。

もし、このようなシュタイナーの考え方を受け入れることができれば、算数や理科のできない子に対する見方もかなり違ってくるのではないだろうか。単に頭がいいとか悪いとかいうふうに分けつけないのではなく、感覚的な把握がどの程度深まっているかを調べ、その子の感覚に未発達なところがある場合には、感覚を育てるという回り道をとるのである。その方が算数や理科を理解させるのにかえって近道になるという方法論、教授法が問題になるのである。それでシュタイナーは、均衡感覚を養うための方法として(同時にそれは算数、幾何を学習するための条件作りになるのだが)、オイリュトミーや体操をやらせる。

例えば『教育芸術 演習とカリキュラム』でシュタイナーは次のように述べている。

「もし特別計算の下手な子がいたら、次のようにするといい結果が得られるでしょう。他の子どもたちが体育、つまりオイリュトミーと体操とを、週に2回、それぞれ1時間ずつ行うとき、計算の下手な子の場合は、計算の授業を短縮して、オイリュトミーか体操を1時間または半時間付け加えるのです。...こういう子には体操やオイリュトミーによって、学習能力を高めることができるようにしなければなりません。そのためにまず棒の練習をさせてください。棒を手に持ちます。1、2、3で前へ、1、2、3、4で後ろへ棒を持っていきます。...それから歩行練習です。3歩前進 5歩後退、3歩前進 4歩後退、5歩前進 3歩後退等々です。大切なのは体操やオイリュトミーに際して、子どもの運動を数に結びつけることです。これを何度でも繰り返すのです。」

*註 フォルメン線描.....シュタイナー学校設立の際に、一番基本的な教科の1つとして、小学校教育の中に初めて取り入れた。授業中、子どもたちがだらけてきたな、疲れているな、などと感じたときに、フォルメンを行う。それによって、子どもたちの神経を集中させたり、疲れている神経をときほぐしたりする。フォルメンは渦巻きだけではなく、いろいろな形があり、学年が上がっていくに従って形も複雑になってくる。

オイリュトミー.....体を使っていろいろなこと(音楽や言葉)を表現する、ダンスに似た表現芸術である。シュタイナー学校の必修科目の1つである。

子どもの語りはじめの言葉にこだわる

筑波大付属小学校 田中博史

算数科で育てる表現力の育成は、人間の考える力の土台となる「論理的な思考力」の育成そのものである。緻密な論理の世界を持つ算数・数学教育ならではの「論理的な思考力」の育成を考えると、子どもたちの言葉を十把一絡げに捉えてはいけなと考えるのである。子どもの「つぶやき」は素直な問いの表出場面である。はっきりと挙手した発表とは違い、あやふやであったり感覚的であったりする。しかしこのような子どもたちの素直に感じた疑問、矛盾などが表現されるようになると授業も変わってくるのである。

「曖昧な子どもの言葉の中に価値ある言葉を見つけ出し、それに寄り添うことで新たな展開を作り出していくこと。」

これが小さなつぶやきを育てていく時のポイントである。子どもたちのいろいろな語りはじめの言葉をすべて同列だと考えるのではなく、それぞれに持っている役目、背景が異なるのだという認識で子どもに接していると、子どもたちの論理的思考力を緻密に、しかも意図的に育てていくのに有効である。

<子どもの「語りはじめ」の言葉をナビゲーションにした理想的な授業の姿>

「たとえば」……促す言葉

個々の子どもの分かり方が表現される。

* 子どもたちに「今分かっていること」と、「これから解決していく未知の分野」との接点を発見させる言葉として、これからも大切にしたい言葉である。

「でも、だって」……拾う言葉

友達の考えにかかわろうとする姿であり、他の意見と絡ませて、自分の考えを深めていくきっかけとなる。

「だったら」……引き出す言葉

ある程度問題解決の糸口が見えてきて、子どもの問いが大きな流れに乗ったところから、先を見通し、新しい可能性を探ろうとする言葉。

* 後半に「だったら」という言葉が出てこない授業は子どもたちに「自ら動くエネルギー」を与えていない授業であると言ってもよい。この言葉が生まれるかどうかは授業の評価そのものになる。

「もしも」……促す言葉

1つの解決の後に、異なる条件の場合などについても調べてみようとする言葉。

< 6年 分数の割り算 >

・黒板に「 $\square \div 1/4$ 」という式を書く。

(T)「この \square の中に、こんな数が入れば簡単になるのになあと思う数をいれてごらん。」

(C)例えば a.「 $1/4 \div 1/4$ とすればいい。」

同じ数で割るのならば、1 となって簡単。

b.「1 を入れて $1 \div 1/4$ とすればいい。」

$1/4$ が 1 の中に 4 回入るといのはもう分かっているから、
答えは 4 だとすぐ分かる。

c.「 $4/4 \div 1/4$ 」

(T)「c の式はどう思う？」

(C)・「だって b と同じ。」

・「でも c の式は、分母が同じ分数を入れればいいと考えたととることができる。」
分母が同じならば $1/4$ がいくつ取れるかは分子 \div 分子ですぐにできるから簡単。

・「だったら何も $1/4$ じゃなくても $6/4 \div 1/4$ のようなのもいいんじゃない？」

・「それなら a や b も同じで、もっとたくさんできる。」

(T)「それぞれの式から「同じ考え」でできる他の式を全部書いてごらん。」

(C)・「a と同じで、 $1/4$ と同じ大きさの分数を入れることで答えが 1 になる割り算の式」

$$2/8 \div 1/4$$

$$4/16 \div 1/4$$

$$8/32 \div 1/4 \quad \text{など}$$

・「b のようにできるのならば、整数を入れる場合は全部その整数の 4 倍が答え」
整数 $\div 1/4$ の場合

$$1 \div 1/4 = 4$$

$$2 \div 1/4 = 8$$

$$3 \div 1/4 = 12 \quad \text{など}$$

(T)「分数の時もそう考えていいかな？」(新たな課題)

(C)・「もしも c のように考えるのならば、分母の違う計算は全部通分すればできるんじゃないかな。a はその反対をやっているだけでしょ。」

分数の割り算は、分数のたし算やひき算のように通分すれば答えが出せる。

(T)「本当かな？」

(C)・「だってね、例えば $3/5 \div 1/4$ は $12/20 \div 5/20$ とするでしょ。するとこれは $12 \div 5$ と同じことだから、答えは $12/5$ となるよ。」

・「分数の時も 4 倍になると言っているみたいだよ。」

(分母の数をかけるのでいい。ex. $3/5 \times 4 = 12/5$)

(T)「これでどんな分数の割り算もできるね。」(断言)

* こういうときは、子どもたちに無理矢理「これで本当にいいのかな」とか「他の場合はどうかな」と持ちかけてものってこない。

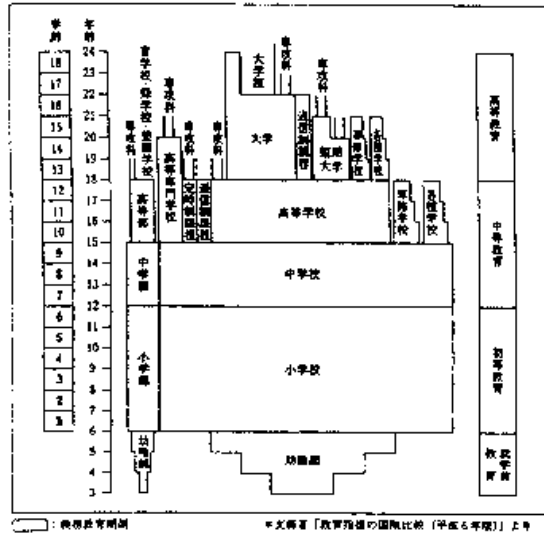
断言されると子どもは逆に不安げになり、「できないときはないか」と探すようになる。

(C)「でも今の1/4で割ったでしょ。分子が1だったからよかったけど、もしも分子が1じゃなかったら…」

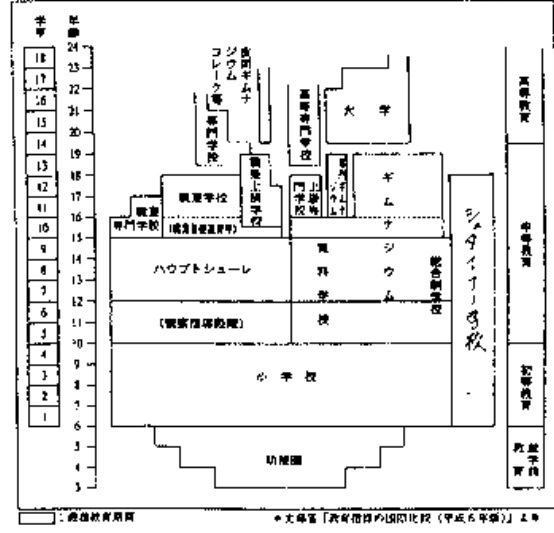
算数教育が実世界とのかかわりをあまりに求めすぎると、せつかく抽象的な数や形を対象にしているからこそできる緻密な論理的思考力の育成の場が弱くなってしまふ。対象が数や形といったものだからこそ、算数の時間にはほかの時間ではタブーとされているあげあしとりに近い論争も十分に楽しめるのである。「だって」「でも」と友達に絡んだ意見を言う場面では大いにそれを楽しませたい。さらに、「それはいつでも使えるの?」や「あのときはうまくいったけど、今度は条件が違うから無理だと思う」というような論法を子どもたちが自在に使えるようにすること自体を、算数教育で担う大きな役割としていきたい。

<ドイツと日本の教育制度の比較>

<日本の学校系統図>



<ドイツの学校系統図>



東京シュタイナーシューレ見学

1. 学校要覧

東京シュタイナーシューレの歴史

子どもたちにシュタイナー教育を受けさせたいと願う親と教師、そしてそれを支援してくれる人々が一緒になり、今から14年前の1987年、8人の1年生クラスが誕生した。

学校目標

「1人の人間として、大地をしっかりと踏みしめ、自らの個性を開花させつつ、世界に向かって立つ自由な人間となることを助ける」ことが、シュタイナー教育の目標である。東京シュタイナーシューレは、このようなシュタイナー教育に基づいて学校を運営している。

「大地をしっかりと踏みしめる」ということは、周りの環境にしっかりと根づいて(郷里に愛着を持ち)歩いていくということである。また、「自らの個性を開花させつつ、世界に向かって立つ自由な人間」というのは、「世界に開かれた人間」(土地の力、文化の力をもった国際人)ということ、人との出会い、物との出会い、文化との出会いを好奇心、信頼感をもって開いていくということである。

この学校では、子どもの本質として、教育が必要な時期を次の3段階で示している。

- (1)世界が善(0～7歳).....美しいもの(良いもの)を模倣して、自分のものとして造り上げていく。
- (2)世界が美しい(7～14歳).....先生の行為の美しさや、芸術的に見て、美しいものを美しいと見るように感情を耕す。
- (3)世界は真実(14～21歳).....自分の内 外へたくさん橋をかけ(客観的に見る)、本格的に思考へ働きかける。

このように人間の一生を7年周期で考えて、子どもの発達段階にかなったカリキュラムにより授業が行われている。そして、調和のとれた成長を目指している。

在籍数

児童数.....89人(1学年1クラスずつ6学年)*来年度は中学校も作る予定

1学級の人数.....15人前後

先生の人数.....20人(校長はいない。教師はみな同じ立場。)

入学条件

- ・体が十分に成長している子ども。
体づくり 頭づくり
- ・障害を持った子どもは難しい。(専門の先生がいない。)
- ・シュタイナー教育について理解を持っている。(親の勉強会がある。)

1日の学校生活

授業内容 (例 4年生 1997.1学期)

	8:30	10:15 ト	10:30	11:15	12:00 ト	13:00	13:45	14:35
			第一専科 第二専科			第三専科 第四専科		
月			英語	英語		水泳		
火	エ ポ ック 授 業	休 み 時 間	英語	英語	昼	オイリュ トミー		
水			練習	ホーム ルーム	休 み	体育		
木			ことば	音楽		音楽	手の仕事	
金			オイリュ トミー	練習		習字		

学校生活の流れは、公立学校とほとんど変わらない。しかし、いくつか違うところもある。1年生は午前中で授業が終わりになるし、毎週土曜日は休みである。給食はなく、お弁当である。

時間割は、「生きているものは、リズムで動いている」という考え方に基づいて立てられている。例えば、

1 時間目...エポック授業

2 時間目...語学、練習

3 時間目...手、体の作業

というようにまず頭へ働きかけ、心、手、足へ広げていくようにする。

行事

月曜日の朝、集会がある。(歌などを歌う。)1年を通しての行事としては、以下のようなものがある。



小学校卒業後の進学

地元の小学校に学籍を置いてあるので、公立中学校へはそのまま行くことができる。私立中学校の場合は、この学校を理解してくれるところへ行く。

2. 授業

呼吸のリズム、眠りを使った授業。授業日数、流れは公立学校とほぼ同じ。

(1) 授業の様子

体形（教室、席）

- ・ 入学から卒業まで1人の担任が継続して受け持つ。
- ・ 教室内の体系は、公立学校と同じ。
- ・ 学年ごとに壁の色が変わり、落ち着いて勉強できる雰囲気になっている。
低...ピンク 中...クリーム 高...ブルー
- ・ 音楽、オイリュトミーのときは、体形が変わる。
- ・ 授業によって、専科の先生が行うこともある。

授業内容

- ・ 芸術的体験によって貫かれている。
ex) 算数、国語などの授業で、笛の合奏、歌といった芸術的活動が組み込まれている。
- ・ 子どもが、内面に生き生きとしたイメージを膨らませることができるように形成する。
- ・ オイリュトミー.....ことばと音楽を、動きを通して表す芸術。シュタイナー学校創立時より全学年の必須科目。
心と体の動きの一致を感じ取り、またそこに普遍的な法則を予感する。
世界と自分との調和あるつながりを見出していく。
- ・ 音楽.....子どものリズム器官に結びつき、内面的に正しい呼吸を育てる。また「聞く」ことを通して、内面の「静けさ」の体験を促す。音楽の中のメロディ・リズム・タクト・ハーモニーなどの要素を子どもの成長段階に合わせて取り上げ、創造性と豊かな感情と共同性を育てる。
- ・ 工芸・造形活動.....子どもたちが、取り巻く環境を健全に造り上げ、個々の人格に健やかに成長させることができるよう助けることが目的。
- ・ 手の仕事.....1年生から始まる授業の1つで、原毛との出会いから編み物へと進み、さらに刺繍や裁縫、人形作りなど、成長に合わせて様々な課題に取り組む。
喜びや驚きとともに世界の秩序と知識を学び、それが心身への安定をもたらす。
- ・ フォルメン線描.....文字を習う前に様々な線(直線・曲線・渦巻きなど)を動きとして感じながら習う。そして、要素的なものから次第に複合的なものへ、美しく調和的な線を描く体験を通して、外の世界にある動き、形の美しさを感じ取る力を育てる。

- ・ことばの授業……全身を使って自分の声と出会い、ことばへの感覚を開いていく。詩や物語の朗唱を通して、相手に向かう姿勢、物事に向かう姿勢を身に付けていくことを目指す。ことば自体の質に向き合うと同時に、「何を伝えるのか」への感覚を養う。
- ・外国語……原則として1年生から2つの外国語を学ぶ。母国語がすでに習得されているこの時期には、一方でまだ十分に生きている模倣の力によって他の言語をも学ぶことができ、それが外国語を学び始める最も自然な方法ある。低学年では母国語の介在なしに行われ、リズムと音声の美しさを味わうと同時に、その言語の土壌である文化、思考習慣への理解の素地を作ることを願って構成される。
- ・過去の歴史を振り返る。
ex) メルヘン 寓話 古事記 …… 現代(16歳ごろ)
- ・3年生で基本的な仕事(源職業)を学ぶ。
ex) 米作り、漁業など

テスト

- ・子どもたちが喜ぶ。(刺激に満ちたものがないから。)
- ・テストをやった後、勉強する。

(2) エポック授業について

子どもの持つリズムは、生き生きとした授業にとって大切な要素である。時間割りの組み立てには、1日のリズム、1年のリズムが考慮に入れている。

国語、算数、フォルメン線描、社会、理科などの主要科目は、朝の1時間45分間の授業で集中的に学ぶ。例えば国語が4週間、社会が3週間というように、同じ科目だけが数週間続く。このように集中的に学ぶ授業のことをエポック授業という。

毎朝行われる主要科目を学ぶこの基本的な授業は、まずリズムの時間によって始められる。歌、笛、朗唱などで、その日の課題に向かう心の準備ができた後、前日に学んだことを再び甦らせる。記憶は眠ることによって意識の底に深められ整理されるので、それを再び思い出すという繰り返しによって記憶力を強め、更に新しい展開がなされるようにする。毎日連続した教材を学ぶことによって、その中に深く没頭することができ、授業に対する集中力が生まれる。集中した時間の最後は、それぞれの学年にふさわしい物語を語りかけていくことで終わる。

教師は、1度教えたことは次の機会にはより発展的に子どもの思考を促せるよう、それを引き出す努力をする。

同じ科目を一定期間取り組むエポック授業では1年に1回から多くても数回しか同じ科目を取り上げることはない。その間、学んだことはいったん忘れられるが、そのことによって意識の深いところで形を変え、再び浮き上がってくる。正しい忘却と記憶のリズムが、知識を新しい能力の発展に変えていく。

(3) 通知表について

保護者への通信

それぞれの子どもの成長に、段階という視点から子どもの学習や学級での様子を年1回学年の終わりに知らせる。

- ・一人ひとり手書きで文章による評価
- ・未来に向けての詩を一人ひとりへ向けて書く。
- ・クラス担当の担任の先生が書くだけでなく、専科の先生などもそれぞれ書く。

3.先生たちの研修

- ・毎週、研修がある。
シュタイナーの本(理念、教育学、教育方法など)をもとに、話し合いをする。
先輩に教えてもらってやってみる。(毎日が勉強である。)
- ・海外研修がある。
世界60ヶ国で650校を超えるシュタイナー学校があるので、そこで、言葉などの壁を越えて研修に赴く。(主にアメリカ、ドイツ、オーストリアなど)
- ・自分で学ぶ。
教育免許を持っていない教師もいる。もともと日本ではシュタイナー教育に興味のある人たち、その多くは子どもの母親が主体となってきたシュタイナー学校なので、日々勉強していく必要がある。

参考資料

- ・「シュタイナーの人間観と教育方法」 広瀬俊雄 ミネルヴァ書房
- ・「教育術」 R.シュタイナー みすず書房
- ・「シュタイナー教育の方法」 高橋巖 角川選書
- ・ルドルフ・シュタイナー教育講座3「教育芸術2 - 演習とカリキュラム」
ルドルフ・シュタイナー著/高橋巖 筑摩書房
- ・<http://www.asahi-net.or.jp/~be9h-ngt/gakko/steinerfaq.html>
- ・http://fame.Calen.ne.jp/yumikom/Steiner/s_was.html
- ・<http://members.Tripod.de/yumiko/Steiner/steiner4.html>
- ・<http://village.Infoweb.or.jp/fwgg5743/hirosi/ronbun3.htm>
- ・<http://village.infoweb.or.jp/fwgg5743/hirosi/算数表.htm>